

私が同教授にはじめて会ったのは1961年の京都でのIGY シンポジウムのときであったが、短身なれども巨漢、日本人間で豪傑とあだ名を呈したほどの押し出しに、いささか怖れをなしたほどであった。昨年夏IAU総会を終ってモスクーを訪れたとき、1日モスクー市やモスクー大学を親切に案内され、長い間抱いていた印象が一

挙にくつがえされた。やはりロシア人独特の性格であろうか。モスクーで別れたのが9月3日、それから5日して、9月8日に急逝されたとの報を受け、しばしばうぜんとした。モスクー大学内の同教授のアパートへ招かれたとき私が写した夫妻の写真が最後のものとなったようである。

新刊紹介

科学史 (体系日本史叢書 19) 杉本 勲編

(山川出版社, A5判, 494+49ページ, 定価 850円)

本書は日本科学史の総合的研究書で、序章科学の概念規定と日本科学史、第1章 東洋古代科学文化の伝来と展開、第2章 科学文化の空白と胎動、第3章 近世科学文化の開花、第4章 自主的科学文化—実学の興隆、までを杉本勲氏が、また第5章 蘭学勃興の諸前提、第6章 蘭学の勃興とその特質、第7章 蘭学の普及と発達、第8章 対外関係の危機と洋学、第9章 幕末の洋学、の各章を住藤昌介氏が執筆されて徳川時代末までの記述が終る。以後の諸章は明治以後現在にいたるまでの期間で中山茂氏が取扱っている。すなわち第10章 国営科学、第11章 科学技術の文化と発展、第12章 戦争への道、第13章 戦後の問題点、で本文が終り、最後に49ページにわたる索引、年表、参考文献がある。

本書の執筆者中の杉本氏、佐藤氏は共に国史研究家で

ある。杉本氏は現在九州大学教授で、国史家として日本科学史にも早くから探究の手をのばされ、法政大学通信教育部の日本科学史、単行本近世実学史の研究などによってその日本科学史観を早くから示しておられる。本書の杉本氏の執筆部分はこの日本科学史の論旨に従ってこの前著を増補されたものである。また佐藤氏は東北大学教授で、洋学史研究序説の著で著名な洋学史の研究家である。このような国史畑の方々、天文出身の科学史理論家の中山氏が分担協力して執筆された点が他書に見られない本書の特色であろう。しかしこの3人の執筆者の日本科学史観や方法論は必ずしも一致していないことが本書の弱点であるかもしれない。しかし私はこの点がかえって日本科学史研究上の問題点を指摘していると考えており、本書の持つ意義とも考えている。特に天文学史関係に多くのページをさいているものではないが、数少ない総合的日本科学史の一つとして会員諸氏に御一読をおすすめし、日本の科学とは何か、天文学を含めて、日本の科学研究を進展させる道は何かというような問題を考察されることを希望してやまない。(広瀬)

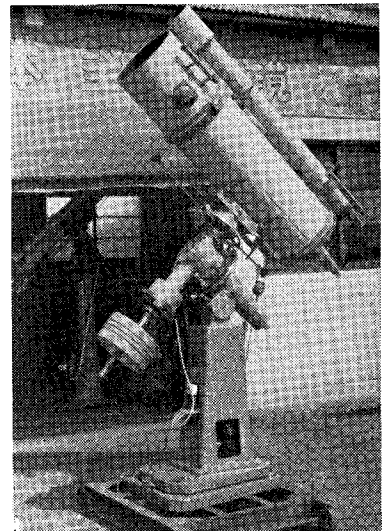
西村製の反射望遠鏡

- | | |
|----------|-------------------|
| 30cm “A” | カセグレン・ニュートン兼用 |
| | 10cm 屈折望遠鏡 (f/15) |
| “B” | カセグレン焦点 |
| | 15cm 屈折望遠鏡 (f/12) |
| 40cm “A” | カセグレン・ニュートン兼用 |
| | 15cm 屈折望遠鏡 (f/15) |
| “B” | カセグレン焦点 |
| | 20cm 屈折望遠鏡 (f/12) |

株式会社 西村製作所

京都市左京区吉田二本松町27
電話 (771) 1570, (691) 9589

カタログ実費90円郵券同封



30 cm 反射望遠鏡

ニュートン・カセグレン兼用